

事後評価報告書

ネパール大震災関連 国際緊急共同研究・調査支援プログラム(J-RAPID)

1. 研究課題名：「避難移住地における感染症流行予防のための生活環境モニタリング」

2. 研究代表者名：

日本側： 高知県立大学 看護学研究科 准教授 神原 咲子

相手側： ネパール看護師協会 会長 タラ ポカレル

3. 総合評価： B

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

当初の想定とは異なったものの、制約の多い環境の中で、ICT を活用した生活環境モニタリングを稼働させ、現地の生活環境改善に貢献できた。本研究における取り組みは災害時のみならず日常的に必要な生活環境モニタリングであり、実際にネパールにおいて継続的取り組みとして導入されつつある点は高く評価できる。また、本活動によって現地の WHO オフィス、保健省、地域保健所およびネパール看護協会間の情報共有体制を構築できたことは、今後のネパールの公衆衛生の体制強化につながるものであり、重要な成果といえる。

一方、大きな計画変更を避けるためには、電力供給事情、インターネット回線等の通信インフラの状況の問題、各種のデータの整合性の問題などは、事前に十分予測されるべきものであり、それらを十分に見越した上での緊急研究としての計画を立てるべきであったと考える。また、生活環境モニタリングについては、それを活用して現地の感染症流行予防に資するという点で具体的にどのような効果があったのか、将来的にありえるのかについても報告することが望まれる。結果として平時の生活環境モデリングのためのシステム開発となったことは理解できるが、主題となる「災害時における緊急対応」という観点へ踏み込んだ検討をして欲しかった。

(2)交流活動の評価について

現地での看護師の役割拡大の必要性、そのために公衆衛生知識・技術の向上が必要であることが WHO オフィスおよび保健省に理解され、ネパール看護協会と Nursing Council が実際に検討することになった。また、本共同研究活動に参加したネパール看護師が自主的にネットワークを構築し、今後の災害看護師活動の推進に向けての道筋ができており、十分評価できる。本共同研究の中で、ネパールの看護教育の中での人材育成の重要性が相手側に理解されるようになった点は重要であったと理解する。大学院を受験した若手看護師が研究代表者の指導を受けられるよう、今後に期待したい。

一方、本プロジェクトの何が相手国の活動の活発化を可能にしたのか、公衆衛生のモニタリングに関して具体的に連携してどのような活動が必要であったのかなどの記述が十分でなかったような印象

を受けた。相手側に博士レベルの研究者がいない点は今後解決すべき重要な点であり、本研究グループを中心に、国費留学などを利用して積極的に人材育成を図ることが望まれる。

(3)その他

終了報告書の記述に工夫が必要である。英文で記述された相手国への「Final Report」に記載してある具体的な結果をもっと盛り込むことにより内容が充実されると考える。

本活動を積極的に進めたネパール看護師活動(EpiNurse Nepal)に対して、国連防災戦略会議(UNISDR)などが開いた国際会議「防災グローバルプラットフォーム」で Risk Award 2017 が授与された。これは日本側チームの活動の支えの賜であると認められ、高く評価できる。